中退予防策に向けた本学学生の簡易調査

白川はるひ
総合教養センター

1．はじめに

文部科学省が公表した「平成 24 年度学校基本調査（確定値）」によると、2012 年春の新規高卒者と浪人生を合わせた四年制大学・短期大学への進学率は 56.2％である。前年度より 0.5 ポイント低下したが、2 人に 1 人が高等教育へ進学する時代は続いている[1)]。しかし、進学率の高まりとともに学力不足や退学率の問題があがってくるようになり、特に読売新聞が「大学の実力」として中退率を示した 2008 年以降、四年制大学の中退率に対して世の関心が寄せられることになった[2)]。

この中退率の問題は、修業年限が少ない短期大学の場合も例外ではない。日本中退予防研究所（2010）が試算した年間中退率では、国立大学 1.6％、私立大学 2.9％、短期大学 4.2％で、むしろ、短期大学の方が高くなっている[3)]。

短期大学は 1993 年が学生者数のピークで、その後の学生数は減少の一途をたどっており[4)]、2012 年度の私立短期大学の入学定員充足率は 88.04％、前年度より 1.59 ポイント減である[5)]。

こうした流れのなかでも進学先として短期大学を選択し入学してきた学生が、中途で退学をしていくことは至極残念なことである。本学は、クラスアドバイザー制度によるきめ細やかな学生指導・支援、出欠席の管理による早めの出席不良者チェックおよび本人や保護者への連絡、基礎学力支援、学生リーダーの育成、奨学金制度の充実、キャリア学習センター職員による定期的な進路面談、その他さまざまな方法で教職員による学生支援を行っている。退学手続きに至る場合も、何度もクラスアドバイザー、学科長などが面談を重ね、安易な中退を防ぐ態勢を整えている。しかし、それでも中退を十分に食い止めているとは言い難いのが正直なところである。

そこで、中退予防策としてさらにどのような取り組みや支援が必要なのかを考えるヒントにするため、2012 年 11 月現在在籍している学生のうち、どの程度の学生が中退を考えたことがあるのかについて、アンケート調査を実施した。

2．調査方法

アンケート調査は、3 日間に分けて授業内で行い、無記名自記式のアンケート調査票を配布、その場で記入させ回収した。実施日と回答人数は以下の通りである。

・2012 年 11 月 8 日 1 年生 3 学科 132 人、（服飾芸術科（以下、服飾）32 名、食物栄養科（以下、食物）73 名、国際コミュニケーション学科（以下、国際）27 名）
・同 15 日 1 年生 3 学科 122 人（服飾 34 名、食物 64 名、国際 24 名）
・同 29 日 2 年生 3 学科 167 人（服飾 35 名、食物 106 名、国際 26 名）

アンケートの質問項目は、中退を考えたことの有無、中退を考えた理由、中退を考えた時期、思い止まった理由、とし、それぞれに選択肢を用意した。また、「学校に求める支援」について自由記述欄を設けた。

3．結果および考察

3.1　中退を考えたことの有無

「本気で考えたことがある」と回答した学生の割合は 3 学科で 12％である（図 1）。アンケート調査の実施日までにすでに退学者は出ているうえ、この時点で長期欠席している学生はアンケートには加

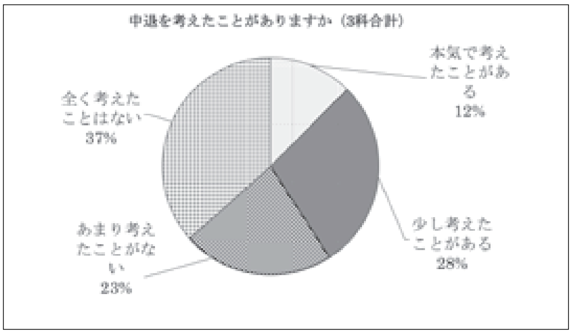

図1　中退を考えたことがあるか（3科合計）

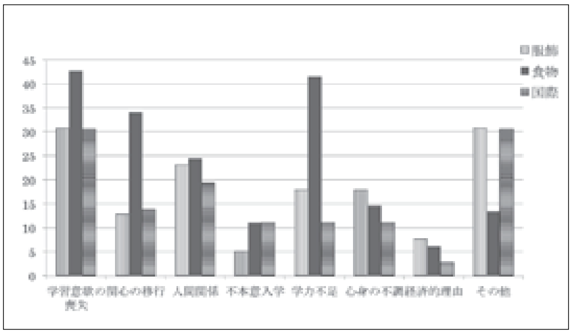

図2　中退を考えた理由（1年生学科別）（複数回答）

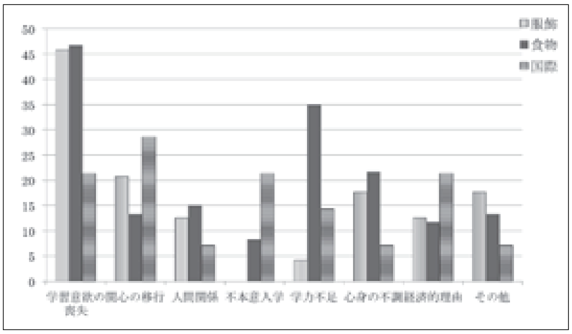

図3　中退を考えた理由（2年生学科別）（複数回答）

わっていないため､それらの学生の声を加えれば｢本気で退学を考えた」学生の割合はさらに上がるはずであり､深刻に受け止めねばならない数値と言える。

3.2　中退を考えた理由

中退を考えた理由については、1年生の結果を中心に見ていくこととする。

日本中退予防研究所（2010）は、中退者へのアンケート調査を行い、退学理由として多い順に、①学習意欲の喪失、②人間関係、③関心の移行、④不本意入学、⑤学業不振、⑥精神・身体の疾患、⑦経済的な理由、⑧妊娠・結婚を挙げている[6)]。今回用意した質問中の選択肢項目は主にこれに倣って8項目用意した。

全1年生の結果は、①学習意欲の喪失、②学力不足、③関心の移行、④人間関係、④その他、⑥心身の不調、⑦不本意入学、⑧経済的理由の順となり、学力不足が2位にきた。これは食物の人数が多いことが大きく影響している。1年生の学科別の集計結果をみると（図2）、3学科のなかで食物の学生がひときわ「学力不足」を理由に挙げていることがわかる。食物1年生で「本気で退学を考えた」もののみをひろってみたところ、46.2%が「学力不足」を理由のひとつに挙げていた。英語の基礎力が必要であろう国際のそれは20%であることと比較すると、計算力や化学などの基礎学力を必要とするうえ、栄養士という資格取得を目指している食物の学生にとって、学力不安が重くのしかかる様子がうかがえる。実際に、2012年12月末までに退学した1年生のプレイスメントテスト（2012年4月1日実施）の得点平均をみると（表1)、数学・国語・英語に関しては、退学者と在籍者の点数に大きな差異はないが、生化学に関しては、退学者の平均得点が在籍者平均得点の6割ほどになっており、化学の基礎学力がやや低いために入学後苦労した経験があることが考えられる。山本（2012）は、ある中堅私立大の中退理由として、文系学部は興味･関心が湧かない、教育負荷が軽いための怠学が主なものになるが、理系全般では基礎学力不足（理数科目)、ソーシャルスキル不足になると述べており[7)]、まさに食物も基礎学力不足が中退理由として大きなウエイトを占めている可能性を示唆している。

日本中退予防研究所では4位に入っていた「不本意入学」は、本調査では7位であった。入学後の2012年5月8日に学内で実施したBenesse「自己発見テスト」の結果をみても、すでに退学した学生の71.4%は本学を第一志望として入学してきており、退学者の多くが不本意入学であろうという考えがあるとすると､それを否定する結果となっている。

表1　プレイスメントテストの結果（食物1年生）（n=158）

科目	数学（50点満点）	国語（50点満点）	英語（100点満点）	生化学（100点満点）
A　在籍者の平均　（点）	34.93	28.27	38.63	69.67
B　退学者平均（点）	29	26.8	40.8	44
B／A × 100（%）	83	95	106	63

しかし、これらの退学学生が、高校時の進学先の決定に際に、十分な比較検討をしないまま安易に本学を第一志望として入学していることも想定される。柳井（2001）は、高校生の進路が未熟なまま決定されることは、その後の大学生活での学習意欲の欠如、アパシー、留年などのさまざまな問題を引き起こしやすいとしており[8)]、たとえ入学直後の調査で本学学生が「第一志望」であったと回答していても、未熟な進路決定の結果の第一志望であれば、その後の不適応行動につながっているものとも考えられる。「第一志望」か「第三志望以下」かという表面的な志望度だけではなく、どのような比較検討、どのような人的影響を受けての「第一志望」選択であったのか、その経緯を詳細に問うことが必要になろう。

経済的理由に関しては、2年生の結果とくらべると、2年生の方が大きな中退願望の理由になっている。たまたまそういう事情を抱えた家庭が重なったのか、1年目の学費は入学前に何とか蓄えてきたものの、2年目の学費支払いは重くのしかかるということなのか、そのあたりは本調査では明らかにできない。

3.3　中退を考えた時期

どの時期に退学したいという気持ちになったかという質問に対しては、1年生の6月が多い（図4、図5）。短期大学においては、5月のゴールデンウィーク以降、学生生活に慣れて気が抜ける学生が増える一方、短期大学特有の忙しさに疲れてしまう学生も目立つ。四年制大学の文系学部の学生を少し忙しくしたようなイメージで短期大学に入学してくる多くの学生にとっては、祝日もなく、授業や課題で要求される内容が上がる6月はつらい時期である。そのような短大生の忙しさや心境を考えるだけでも、全般を通して休み明けに数値があがるのは、致し方のないことであろう。

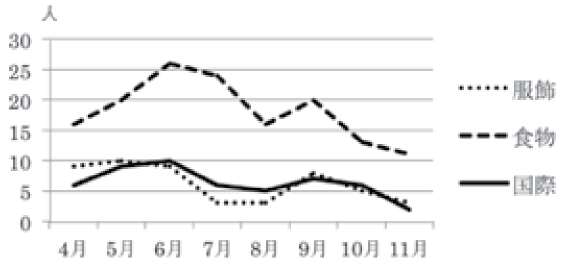

図4　どの時期に退学したいという気持ちになったか（1年生）

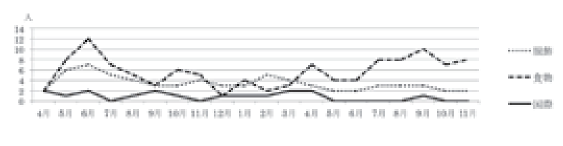

図5　どの時期に退学したいという気持ちになったか（2年生）

食物に関しては2年生の7月から数値が少し上がり、多少の上がり下がりはあるものの、11月まで若干高めの数値が続いている。短大生活も2年生の後期になれば4分の3ほどが終わる頃であり、他学科は卒業に向けての安定時期に入っていくが、栄養士として就職を目指す場合はこの2年生の秋に就職活動が始まることも少なくない。栄養士実力認定試験を12月に控えているうえ、学外実習、就職活動、課題提出などせわしない状況が続くため、他学科よりプレッシャーがかかることが要因であると考えられる。

3.4　なぜ中退を思いとどまり、学校を続けることができたのか

中退を考えたものの、実際の退学行動に移さずに学校を続けられた大きな理由として、3学科1・

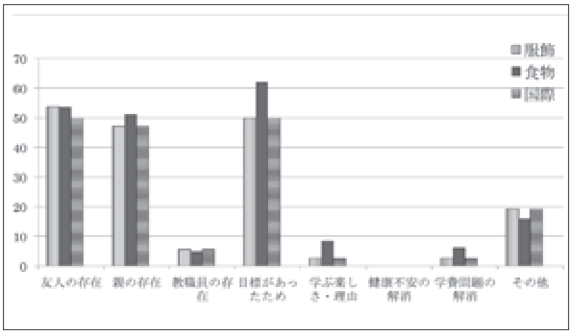

図 6　学校を続けられた理由（1 年）（複数回答）

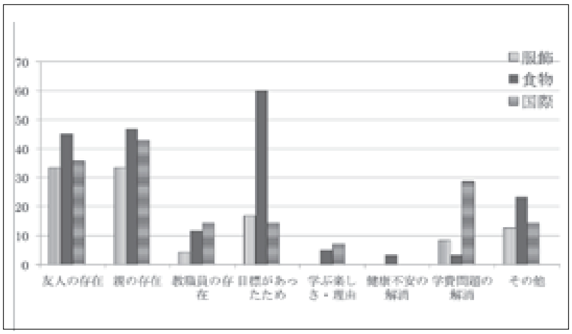

図 7　学校を続けられた理由（2 年）（複数回答）

2 年生とも「友人の存在」と「親の存在」をあげている（図 6、図 7)。「親の存在」については細かい理由を質問していないため、励ましてくれた、温かく見守ってくれたという理由もあれば、学費や仕送りをしてくれている親への感謝、中退した場合の申し訳なさ、あるいは、親が怖くて中退したいという意思を伝えられなかったなどの理由すべてが含まれる。学科別の特徴としては、「目標があったから」という理由が食物栄養科のなかで最後まで残っていくところが目立ち、栄養士を目指して入学してきた食物の学生たちが、資格取得という目標を「ふんばる力」にしていることがわかる。

4. まとめと今後の課題

各大学が様々な取り組みをしているように、中退予防策を挙げると枚挙にいとまがない。また、今回のアンケート調査はまったく簡易なものであり、退学者への細かい聞き取りをはじめとして、学生の声に耳をかたむけた詳細な調査・分析が必要である。

それでも、本調査から私が強く必要性を感じた支援策として、相談体制の強化･充実、基礎学力支援、友人関係づくりの支援の 3 点をあげたい。

アンケートの自由記述の欄には、「ゆっくり面談や相談する時間が欲しい」「何でも話せる相談所（が欲しい)」「気軽に相談できる場所（が欲しい)」など、さらに相談に乗ってほしいという内容のものが散見された。本学は教職員と学生の距離が極めて近い学校であると考えているが、実際に相談したいと考えている学生からすると、教職員の態勢がまだまだというところがあるようであるし、第三者の活用が今ひとつと言える。ゆっくりと話をきくことのできる体制の強化が、人員、環境ともに求められる。

また、食物の学生を中心にして、基礎学力の支援をさらに充実したものにする必要がある。入学後の支援体制だけに目を向けるのではなく、入学前教育の内容から検討をしていく必要があるだろう。

さらに、友人の存在で中退を思いとどまる割合が高いことを考えると、早くにスムーズな友人関係作りを後押しする仕組みがあってよいと考える。それによって、1 年生 5、6 月の中退願望の一番高まる時期に、友人同士で支えあえるようにもっていければと考える。本学は 2013 年度の新たな取り組みとして、新入生の友人関係づくりを大きな目的とする行事を計画している。こうした取り組みがどのような効果を生み出すのか、検証していきたい。

謝辞

アンケート調査に協力頂いた学生の一人一人に御礼を申し上げるとともに、調査表の集計業務を担当した総合教養センター助手の大橋諒子さん、また、ご助言、励ましを下さいました皆様方に深謝いたします。

引用文献

1）文部科学省:「平成 24 年度学校基本調査」、(2012)
2）読売新聞「大学の実力　教育力の向上への取り組み」、(2008 年 7 月 20 日、同 21 日)
3）日本中退予防研究所：『中退白書 2010　高等教育機関からの中退』、p8、(2010)
4）文部科学省：学校基本調査　年次統計

5）日本私立学校振興・共済事業団　私立経営情報センター：「平成 24（2012）年度　私立大学・短期大学等入学志願動向」、p28、（2012）
6）日本中退予防研究所：前掲書、p17
7）山本繁：「『高大接続』に関する問題提起」、p9、文部科学省　高大接続部会（第１回）配布資料ホームページより取得（2013/1/12）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2012/10/03/1326447_2.pdf>
8）柳井修：『キャリア発達論』、p88、ナカニシヤ出版、（2001）